

失語症からボランティアへ

久住 孝 さん
興野一区・四十四歳

「青天の霹靂」ということがばある。久住さんの場合、それは七年前に起きたクモ膜下出血だった。三十七歳、働き盛りの時である。一命はとりとめたものの、それ以後、久住さんには右半身マヒと失語症という障害が残された。

失語症は、考えたり思ったりするとは普通の人と変わらざるでできるが、それをことばで表現することが困難という障害である。「思っているもそれがことばにならない。ことばが出て、自分がいうつもりだったことばとは違うことばが出る。人のことばにも即座に対応できない。それがとてもはがゆい」と久住さん。発病前は人より早口だったそうだからなおさらだろう。

現在は訓練のおかげでなんとか人と話ができるし、自分で文章を書くこともできるようになった。それでも「おはようございます」ということが言えるようになるまで三年かかったという。特に発病後すぐの、病院での訓練は大変だった。普通の訓練時間以外にも、宿題として、食事の時にその食べ物何か書かなくてはならない。トマトならトマトとはわかるのだが、それがことばや文

字になって出てこないのだ。そのため、食事を始めるのが、まわりの人が食べ終わったところになる。さらに、五十音を最初から書く練習を繰り返した。右ききだったのに右半身がマヒしてしまっ

たため、文字を書くのに左手を使わなければならぬ。ひらがなが特に難しかったという。

退院してからしばらくは自宅に閉じこもっていた。それが役場の保健婦に勧められ、親和会へ。親



久住さん。ボランティア・グループつえの会の研修で。カメラは Cannon A1。左手で操作するための器具をつけている。「シャッタースピードが60分の1秒だと、さすがにブレますね」

「おかげで毎日いそがしい、はりのある生活を送っています。ボランティアはほんとに好きでやっています」という久住さんの表情には人を元気づけてくれる何かがある。

和会とは脳卒中後遺症に悩まされる人たちの会だ。最初は、自分とは年齢の離れた人ばかりで、しかも久住さんより症状の軽い人たちがばかりだったため、一回行ったことが無理とわかり、何かしなくてはというところで、再び参加。会報の編集委員になって、編集をしていくうちに自信もついた。また昔から好きだったカメラも、会の行事を写すために、再び手にするようになった。さらに、テレビで筋萎縮症の人たちを手助けする人たちを見て「自分も何か手伝いたい」と、ボランティアグループのつえの会にも参加した。

ほんの一冊



秘宝月山丸
高橋 義夫 (新潮社)

作者の高橋義夫さんは「闇の葬列」と

いう小説(町図書館に置いてあります)で直木賞候補になりました。また、一昨年、山形県の西川町に引越して「田舎暮らし」を実践(?)しています。

この小説は、作者自身をモデルにしたとおぼしき「わたし」が、山形県の月山の麓に一人で引越して来たところから始まります。筋といっても、殺人とか大事故のような大きな事件が起きるわけではなく、地元の人たちとの交流、といっても淡々としたものでなく、少々なまぐさいところもあるようなつきあいが、冷静な筆致で描かれています。

「日本の田舎」の現在を、決して美化せず、見下しもせず、リアルに描きだしている稀有な「小説」です。

(人の動き)

8月末日現在	(前月比)	前年(同月比)
人口	23,188 (+23)	[+115]
男	11,354 (+7)	[+3]
女	11,834 (+16)	[+112]
世帯	6,163 (+4)	[+59]
8月1日～末日		
出生	25	転入 64
婚姻	1	転出 59
死亡	10	



●来月号の表紙
県の観光物産センターを取り上げる。の進出などを含め、観光予定です。また、議会議例とふるさと創生一億円についてもお知らせします。今後町の予定としては、現在集計中の町民アンケート。要望など、役場企画開発課広報係にのしどしお寄せください。ハガキでも電話(内線46)でもかまいません。

